

新規選定① 北前船で栄えた能登天領の集落

輪島市黒島地区伝統的建造物群保存地区

所在地 石川県輪島市門前町黒島町イ、口、ハ、^{かわらば}瓦場、^{たかいけ}高池、^{しみずだ}清水田、1及び2の各一部

面積 約20.5ヘクタール

輪島市は能登半島の北西部に位置する。市西部の門前地域に含まれる黒島町は、江戸時代の大半を幕府領として支配された。黒島集落は、西は日本海に面し、砂浜から東方の山裾に上る緩斜面に街道に沿って南北に長く形成される。

集落の成立は16世紀前半と伝え、16世紀後期には廻船業を始めた^{ばんじょうやぜんえもん}番匠屋善右衛門が加賀一向一揆の用米を運んでいる。江戸時代に入ると北前船の船主が現れ、日本海航路による海運業の発展を背景に集落は成長を遂げた。江戸中期に150戸程の家数は、明治前期には500戸を超え、集落は街道に沿って南北に伸びて現在の町並みの骨格を形成した。

保存地区は、東西約680m、南北約1300m、面積約20.5haの範囲で、全盛期の頃の集落全域及びこれと関連する墓地等を含む。往時の道路や敷地割が良く残り、街道沿いを中心に伝統的な主屋が建ち並ぶ。片側を通り土間とし、中央にチャノマを置き、床と仏間を設えたザシキを表通りに面して置くものが多く見られ、中でも船主の住宅は中庭をコの字で囲む独特の平面形式を見せる。時代により構造形式に違いが見られるものの、黒色の釉薬瓦、外壁の下見板張り、正面開口部に取り付く格子が町並みに統一感を与える。

輪島市黒島地区伝統的建造物群保存地区は、北前船の船主や船員の居住地として発展した集落である。平成19年3月の能登半島地震で大きな被害を受けつつも、最も栄えた明治初期の地割を良好に残し、伝統的な主屋が敷地内の庭園や土蔵、社寺建築、石造物、樹木と共に歴史的風致を良く伝え、我が国にとって価値が高い。



街道沿いの町並み



高台から見る黒島集落

輪島市黒島地区伝統的建造物群保存地区

伝統的建造物（建築物）の位置及び範囲図

- ◀ 凡例 ▶
- - - - : 伝統的建造物群保存地区
 - : 特定物件（148件）



新規選定② 高度な水利技術を伝える矢部川流域の在郷町

黒木町黒木伝統的建造物群保存地区

所在地 福岡県八女郡黒木町大字黒木字上黒木、字下黒木及び大字今字上黒木の全域
並びに大字黒木字中黒木、大字今字中黒木、字築山、字平ノ前、字谷、
大字桑原字町裏、字葉山、字久保、字伏ノ木、字北屋敷、大字本分字東馬場、
大字木屋字劔ヶ淵、字家岩ノ迫、字町ノ向、字東城、字寝子屋岩の各一部
面積 約18.4ヘクタール

黒木町は、福岡県筑後地方の南部、矢部川と笠原川の合流点の北西に形成された。中世の猫尾城の城下を起源とし、猫尾城の廃城後、元和6年(1620)に筑後国が久留米藩、柳川藩に分割されると、矢部川がその境界となり、黒木の町は久留米藩の在郷町となった。

黒木は、天正15年(1587)に現在の下町が、次いで慶長年間に東に続き一旦北にクランクする形で道を通し、中町、上町が町立てされたと推定される。その際に中井手用水が、次いで正徳4年(1714)に黒木廻水路が整備されて現在の町並みや水路の基礎ができ、以後、江戸時代を通じて栄えた。

文政4年(1821)に上町、明治13年には上町、中町、下町の一部を焼く火事が起こり、町家の主屋は茅葺から居蔵造への変化が促されたと考えられる。居蔵造は入母屋造妻入、棧瓦葺で正面と両側面に庇をつけ、外壁を塗り込め、二階正面は縦長窓を数か所穿つ。外壁下部の雨掛かりには近在で産出する巨大な青石を貼るものもある。

保存地区は東西約1100m、南北約400m、面積約18.4haで、矢部川右岸の黒木町、矢部川の水面及び矢部川左岸に広がる農地を含む。

黒木町黒木伝統的建造物群保存地区は、高度な水利技術で知られる矢部川の中流域に近世前期に成立した在郷町を中心とする。表通りの一部は近代に拡幅されたものの、近世後期以降の居蔵造の重厚な町家が残るとともに、矢部川の堰や木橋、町中を流れる水路、矢部川対岸の棚田など水利にまつわる歴史的風致を良く残し、我が国にとって価値が高い。



黒木上町の町並み



黒木下町の町並み

黒木町黒木伝統的建造物群保存地区

